

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	宇宙空間研究委員会 (コスパー)
	英	Committee on Space Research (略称 COSPAR)
	団体 HP (URL)	<a href="https://cosparhq.cnes.fr/">https://cosparhq.cnes.fr/</a> (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 無 )
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>新しい科学成果</p> <p>太陽系探査機や宇宙望遠鏡による観測により、火星における季節変動する地下水の流出と間欠的なメタンの噴出、地下海の存在を示す氷天体のプルーム活動が発見された。冥王星は氷の地質活動の証拠が多く残る天体であることが明らかになった。宇宙望遠鏡ケプラーは、系外地球型惑星が普遍的な存在であることを明らかにしている。</p> <p>木星探査機 JUNO (米) は、木星表面の荒々しい大気運動を捉えるとともに、内部構造を制約する重力データを取得している。カッシーニ探査機は最後に土星を縦に周回する軌道を取り重力などの観測を行った後、土星に衝突して使命を終えた。あかつき探査機 (日) は金星周回軌道投入に成功し、金星の気象学とくに大気の運動と波動の伝播に新しい知見を与えている。はやぶさ 2 (日), OSIRIS-REX (米) は予定通りターゲットの小惑星に到達して、詳細な観測データを取得し始めている。</p> <p>国際情勢と COSPAR</p> <p>2016 年イスタンブール総会は、現地情勢の悪化のため最終的にキャンセルされた。一方、2017 年の韓国済州島でのコスパーシンポジウム、2018 年のパサデナ総会 (米) は、多くの参加者を集めて成功したと言える。</p> <p>COSPAR は 1957-1958 年にわたって行われた国際地球観測年 (IGY) での観測ロケット及び人工衛星による研究を更に協力的に進めるために 1958 年 10 月、ICSU (国際科学会議) により創設された。そして、冷戦時における東西の宇宙科学関連分野の橋渡しの役割を担っていた。1980 年から隔年開催となった COSPAR は 1994 年以降、科学総会をベースとする広い宇宙科学分野の学術団体となった。運営組織は、総会時に加入国代表者による選挙により選ばれる。1998 年には、アジアで初めてとなる科学総会が日本 (名古屋) で開催され、さらに、中国(2008)やインド(2012)が続いた。宇宙科学の国際化の流れが大きくなっている。</p> <p>その中で 2014 年のモスクワ総会の年、2 月のアブストラクト投稿締切後に、ロシアによるクリミア併合という緊迫した政治情勢となったが、関係者の熱意と尽力により、2000 名を超える参加者で総会を成功させている。政治的に困難な時</p>	

## 様式第 2 (第12条関係)

	<p>期の国際会議を成功させることで、宇宙科学の国際協力の重要性を周知できたと考える。</p> <p>2016 年は、中東（さらにヨーロッパ）においてテロが頻発する中、イスタンブール総会は、最終的にキャンセルとなった。安全に最大限の注意を払った上での開催を検討していたが、軍によるクーデター未遂事件が決定的となった。総会がキャンセルとなったため、2020 年の総会候補地の選定は電子投票で行われ、シドニー（オーストラリア）が選ばれた。事前に提出された申請書類を評価委員会が精査し、その報告資料で一番評価が高かった都市が順当に選ばれた。</p> <p>2018 年のパサデナ総会時には、2022 年の総会開催地が、各国代表者会議で選ばれた。ヨーロッパの 4 都市が立候補して、アテネ（ギリシャ）が選ばれた。</p> <p><b>COSPAR 執行部</b></p> <p>パサデナ総会時の各国代表者会議では、役員選挙（会長は事前投票の結果を公開）が行われ、Fisk が会長に再任された。また、COSPAR の事務組織は（パリに拠点を残した上で）フランス南部のモンペリエに移動した。2020 年に事務局長が、Fellous 氏から Foing 氏に交代した。</p>
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	<p>「宇宙天気」は太陽活動の変動が、太陽風や地球磁気圏の変動を通じて、地磁気や放射線帯、宇宙線量、オーロラ活動に影響を与える現象の総称である。人工衛星のトラブルや、広範囲の電気・電波障害などを引き起こすため、社会的にも関心が高く近年大きくひろがった分野である。宇宙天気の研究は、宇宙空間、地上双方からの観測に支えられている。COSPAR は、今後 10 年の研究戦略をまとめてロードマップを ILWS と共同で作成した。” Understanding space weather to shield society: A global road map for 2015–2025 commissioned by COSPAR and ILWS” として COSPAR のジャーナルの 1 つ、Advances in Space Research に 2015 年に出版された。パネルの前委員長小原隆博氏ら 2 名の日本人が著者として含まれている。</p> <p>「惑星保護」は、有機物や生命体による天体の汚染が太陽系探査で起きないようにする考えで、探査計画に制約を与える。例えば火星着陸機は滅菌処理を徹底し、火星周回機は最後に高度を上げて火星突入を避ける、などである。これまで COSPAR は、すべての太陽系探査にかかる惑星保護対策のポリシーを制定し、最新の科学成果に基づいて同ポリシーを不断に改訂するとともに、各種探査の惑星保護対策に関するワークショップなどの財政支援を行ってきた。探査機に含まれる地球物質（バクテリアなどを含む）による探査天体の汚染可能性だけでなく、サンプルリターンでは、取得したサンプルによる地球生命圏の汚染の可能性も議論しなければならない。はやぶ</p>

様式第 2 (第12条関係)

	<p>さ、はやぶさ 2 の小惑星探査計画では、日本が提案した惑星保護対策が国際的な専門家によって審査・評価され、COSPAR 惑星保護パネルの承認を得てから打ち上げられている。そうした 10 年以上の活動を通じて日本人参加者が信頼を重ねた結果、2014-2018 年には日本人として初めて矢野創委員（宇宙科学研究所）が惑星保護パネル副委員長を務めた。さらに 2018 年に惑星保護パネルは各国の宇宙機関代表が関わる形に大幅な改組が行われ、日本からは常田佐久委員（国立天文台台長、前宇宙科学研究所所長、23-24 期連携会員）がメンバーとなった。</p> <p>「気候変動」は広義においては様々なスケールの気候の変化を指すが現在では地球温暖化に関連して近年の非人為的・人為的トレンドを指す。精密な観測と数値モデルが重要となるが観測においては地球観測衛星の果たす役割が大きい。現在作成が行われている IPCC（国連の気候変動における政府間パネル）第 6 次報告書においても米、欧、日などの地球観測衛星による地球規模の観測データは精密観測の重要な部分を占めており COSPAR の貢献は大きい。その意味で COSPAR は政策決定にも重要な役割を果たしているといえる。</p> <p>「能力開発(Capacity Building)」も COSPAR の大きな活動となっている。発展途上国を中心に、毎年数回能力開発ワークショップが開催されている。宇宙空間の地上観測だけでなく、近年は超小型衛星を各国が打ち上げる機会が飛躍的に増えてきたことから、COSPAR の様々な科学委員会に関連する能力開発は重要な活動となっている。</p> <p>なお、COSPAR 科学総会における科学セッションや、隔年シンポジウム、毎年複数回開催される能力開発ワークショップにおいても、各科学委員会毎の分野に加えて超小型衛星に関する会合が近年増加している。特に 2017 年に韓国・済州島で開催された隔年シンポジウムでも超小型衛星による宇宙科学が主題となり、宇宙科学研究所や東京大学等から多数の日本人が科学組織委員会や基調講演者としてその運営に貢献した。</p>
<p>日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて</p>	<p>佐々木晶委員(21-24 期連携会員)は、2010-2018 年の 8 年間にわたり理事をつとめ、中国とともにアジアの代表として COSPAR の運営を支えてきた。2018 年より JAXA/ISAS の藤本正樹委員が理事となり、日本の宇宙機関から COSPAR の運営に直接関与する体制となったことはさらに意義が大きい。とくに我が国が力をいれ国際的な評価も高い「はやぶさ」「はやぶさ 2」に続く将来のサンプルリターンミッションの惑星保護対策でも COSPAR 惑星保護パネルによる承認が重要となるため、日本が主導できることは重要である。</p> <p>高層大気分野(科学委員会 C)は、天文学分野とともに、COSPAR で参加者の多い分野である。地上観測や地域的な研</p>

様式第 2 (第12条関係)

	<p>究も含むため、参加国の数ではおそらく最大である。科学総会では毎回 700 件程度の講演を集める。中村卓司委員 (23-24 期連携会員) はこの科学委員会 C の副委員長・委員長を 16 年にわたり務めており、総会セッションの充実と、分野内外の意志交流を図ってきた。</p> <p>地球観測分野(科学委員会 A)では、データ利用・共有が大きなテーマとなっており、我が国も大きく関わっている。地球観測衛星に関わる世界的取組 GEO に関するセッション A0.1 が作られている。GEO のデータ利用促進計画のレビューに科学委員会 A の副委員長の新井康平(22 期、24 期特任連携会員) が COSPAR 代表として貢献してきた。</p> <p>そのほか、科学委員会 B, E, 科学気球に関するパネル他多数のパネルで日本人が委員長や副委員長などの役割を果たし組織運営に貢献している。</p>
<p>加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて</p>	<p>COSPAR の活動を通じて、日本の宇宙科学の成果や今後の計画が広く世界の科学者に伝わる機会が得られている。COSPAR 総会・シンポジウムの招待講演、一般講演や、Space Research Today 誌を通じた報告は、具体的な例である。COSPAR は、日本で隔年に開催される国際会議(International Symposium on Space Technology and Science)のスポンサー団体である。</p> <p>太陽系探査で重要な惑星保護 (惑星検疫) (Planetary Protection)の問題では、COSPAR の惑星保護パネルが主導的な役割を果たしており、はやぶさ、はやぶさ 2 の小惑星探査計画における惑星保護対策は、その承認を得る形で、進められた。COSPAR の承認 (お墨付き) が無ければ試料回収場所として、オーストラリアの協力を得ることは困難であったと思われ、国民を感動させた、はやぶさ計画の最終段階は遂行できなかった可能性が高い。太陽系小天体の探査は国民にも理解しやすく大きな支持を得ている分野であるため、COSPAR の我が国の科学の推進への貢献は顕著である。</p>
<p>その他 (若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)</p>	<p>若手研究者育成について</p> <p>COSPAR の科学総会、シンポジウムでは、若手研究者 (院生、ポスドク、准教授クラスまで) への参加旅費のサポートを行う制度がある。総会の前年、それぞれのセッションのオーガナイザーは、旅費サポートの寄付を募るためセッションの関連企業・団体のリストアップを求められる。寄付の依頼は COSPAR 本部から行う。参加旅費サポートはオーガナイザーに権限があり、日本の若手研究者も選ばれる。COSPAR 総会では、Advances in Space Research 誌に掲載された 31 歳以下の若手研究者による優れた論文に Outstanding Paper Award が表彰される (論文 10 編毎に 1 編の割合)。また、各科学委員会(A-H)ごとに、36 歳以下の若手研究者を対象として Zeldovich medal を総会年に授与される。2018 年のパサデナ総会では、北海道大学の鎌田俊一氏(科学委員会 B)、横浜国立大学の矢野大志氏</p>

## 様式第 2 (第12条関係)

	<p>(科学委員会 G)が受賞した。また 2016 年には放射線医学総合研究所の小平聡氏 (科学委員会 F) が受賞した。2020 年は総会が翌年に延期されたが、京都大学の坂崎貴俊氏 (科学委員会 A)、国立極地研究所の西山尚典氏 (科学委員会 C) の受賞について、21 年のオンライン併用総会で受賞予定である。</p> <p>COSPAR が最近進めている事業で評価が高いのが能力開発ワークショップである。開発途上国や、宇宙開発に比べてサイエンスが遅れている国などにおいて、特定テーマについて講義・実習合わせて 2 週間のワークショップを大学院生・若手研究者のために開いている。またワークショップ参加のための旅費支援制度も備えており、年間 8~9 万ユーロの支出を行っている。2016 年のロシア・カムチャッカ、2017 年の韓国、台湾で開催されたワークショップには、日本人研究者が講師として貢献している。</p> <p>女性研究者の登用については、COSPAR の附則に、推薦委員会が (各国代表者や科学コミッションから出された候補者から) 役員の新選挙候補者を絞る時、科学諮問委員会委員を選ぶ時に、留意しなければならないことを明記している。近年、理事には女性が継続して選出されている。日本からは、科学委員会 A (笠井庸子委員)、C (江尻省氏:2014-2018、埜千尋氏) などサブコミッションの女性役員を輩出している。</p>
--	--

## 2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

<p>総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)</p>	<p>1998 年に名古屋で科学総会を開催した。90 年代以降、複数回、総会を開催したのは、アメリカ、ドイツである。最近は、ヨーロッパ、アメリカ、アジアが偏りなく選ばれる傾向がある。現在、2020 年代における日本での招致の可能性について、COSPAR の事務局と連絡を取りながら、必要な国内体制、開催候補地等の議論を、COSPAR 小委員会で行っている。</p> <p>理事会・科学諮問委員会・プログラム委員会は、毎年 3 月に宇宙関連会議 (工学系が多い) に合わせて、パリで開催されるため、総会時以外に開催予定は無い。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定について</p>	<p>COSPAR 役員の任期は 2 期 8 年までである。2010 年から 8 年間理事を務めた佐々木晶委員が本年任期満了したため、役員の新選挙権を有する日本の代表を藤本委員に交代した。7 月の代表者会議にむけた役員選挙に藤本委員が立候補し、当選して、<u>日本から途切れることなく理事を継続することに成功した。</u>藤本理事の 1 期の任期は 2022 年までであるので、今後その再選に向けて取り組むことになろう。</p> <p>なお、科学委員会委員長はプログラム委員、科学諮問委員を兼ねるため重要なポジションだが、同時に会長をはじめ役員の新選挙権も有するため日本からの選出を考慮する必要がある。科学委員会 C (上層大気) の委員長の中村卓司委員は 2020 年までの任期である。今後、他の科学委員会での委員長選出へ</p>

## 様式第 2 (第12条関係)

	向けた動きも重要になる。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	理学工学が一体となり効率的な宇宙科学衛星開発を進めてきたのが日本の強みである。(はやぶさ2のコストは、同様の探査を行う OSIRIS-Rex のおよそ半分)。これを生かして、小型衛星を使ったコストが低く開発時間も短い宇宙科学・探査を提案していく予定である。SLIM 月着陸ミッションはその一例である。火星衛星サンプルリターン計画、X 線天文衛星、次期太陽観測衛星、赤外線天文衛星などサイズの大きな計画は、国際協力が重要な要素になる。

### 3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去5年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	<p>○総会は隔年で開催される。</p> <p>2022 年 (開催地: アテネ・ギリシャ (予定))</p> <p>2020 年 (開催地: シドニー・オーストラリア (予定))</p> <p>※翌年 2021 年に延期してオンラインとの併用で開催予定</p> <p>2018 年 (開催地: パサデナ・アメリカ)、</p> <p>2016 年 (開催地: イスタンブール・トルコ (開催中止))、</p> <p>2014 年 (開催地: モスクワ・ロシア)、</p>
	理事会・役員会等開催状況	<p>○理事会は、毎年3月にパリ及び隔年の総会時に開催される。</p> <p>2021 年 (オンライン開催 (予定))</p> <p>2020 年 (中止))</p> <p>2019 年 (開催地: パリ・フランス)</p> <p>2018 年 (開催地: パリ・フランス、パサデナ・米)</p> <p>2016 年 (開催地: パリ・フランス)</p> <p>2015 年 (開催地: パリ)</p> <p>2014 年 (開催地: パリ、モスクワ・ロシア)</p> <p>○各国代表者会議は、総会時に開催される。</p> <p>2021 年 (開催地: シドニー・豪 (予定))</p> <p>2018 年 (開催地: パサデナ・米)</p> <p>2016 年 (開催地: イスタンブール・トルコ (開催中止))</p> <p>2014 年 (開催地: モスクワ・ロシア)</p>
	各種委員会開催状況	<p>○科学諮問委員会、プログラム委員会は3月にパリで開催。</p> <p>2021 年 (開催地: パリ・フランス (予定))</p> <p>2020 年 (中止))</p> <p>2019 年 (開催地: パリ・フランス)</p> <p>2018 年 (開催地: パリ・フランス)</p> <p>2017 年 (開催地: パリ・フランス)</p> <p>2016 年 (開催地: パリ・フランス)、</p> <p>2015 年 (開催地: パリ・フランス)、</p> <p>2014 年 (開催地: パリ・フランス)、</p> <p>○分野別科学委員会、パネルは総会時に開催される。</p> <p>2021 年 (開催地: オンラインおよびメール)</p> <p>2018 年 (開催地: パサデナ・米)</p> <p>2016 年 (開催地: イスタンブール・トルコ (開催中止))、</p>

様式第 2 (第12条関係)

	研究集会・会議等開催状況	<p>2014 年（開催地：モスクワ・ロシア）、</p> <p>○2013 年より、テーマを絞ったコスパーシンポジウムが隔年（総会が行われない年）で開催されている。</p> <p>2021 年（開催地：シンガポール（予定））</p> <p>2019 年（開催地：ヘルツリヤ、イスラエル）</p> <p>2017 年（開催地：濟州島、韓国）、</p> <p>2015 年（開催地：フォストイグアス、ブラジル）、</p> <p>○能力開発（Capacity Building）ワークショップ</p> <p>2020 年（開催地：チリ（延期）、マレーシア（延期））</p> <p>2019 年（開催地：インド）</p> <p>2018 年（開催地：エクアドル、エチオピア、ブラジル）</p> <p>2017 年（開催地：アルゼンチン、ガーナ、韓国、台湾）</p> <p>2016 年（開催地：メキシコ、ロシア）、</p> <p>2015 年（開催地：ベトナム、ブラジル、タイ）、</p> <p>2014 年（開催地：インドネシア、ロシア、メキシコ）、</p>																			
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	<p>2018 年科学総会(パサデナ) 160 名（内代表派遣 1 名）、2014 年 科学総会（モスクワ）、256 名（うち代表派遣 1 名）。各科学委員会、パネルの会議は科学総会の期間中に開催され、関連分野の日本人総会参加者は出席している。理事会、プログラム委員会、科学諮問委員会は、毎年 3 月にパリの COSPAR 本部で開催される。2019 年および 2018 年の会議では、理事会 1 名、プログラム委員会 2 名、科学諮問委員会 1 名が参加した。2017 年の会議は、理事会 1 名、プログラム委員会 3 名、科学諮問委員会 3 名、2016 年の会議では理事会は 1 人、プログラム委員会は 3 人、科学諮問委員会には 2 人が参加し、1 名（共通）は代表派遣である。</p> <p>コスパー隔年シンポジウムへの日本人参加者は、15-30 人程度（全参加者の 1 割前後）である。毎回、日本人 数名がプログラム作成に関わっている。2015 年のブラジルのシンポジウムではプログラム委員の中村卓司が代表派遣で参加した。</p> <p>能力開発ワークショップの講師として 2015 年（タイ）に新井康平（佐賀大）が参加した。2016 年（ロシア）の宇宙天気ワークショップには、塩川和夫（名大）ら 3 名の日本人が講師を務めた。2017 年の台湾での電離圏モデル(IRI)ワークショップでは渡部重十（北大）が、2018 年のブラジルでの宇宙天気ワークショップでは、大塚（名大）が講師を務めた。</p>																				
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去 5 年）	<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="545 1686 710 1742">役職名</th> <th data-bbox="710 1686 927 1742">役職就任期間</th> <th data-bbox="927 1686 1118 1742">氏名</th> <th data-bbox="1118 1686 1402 1742">会員、連携会員の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="545 1742 710 1787">理事</td> <td data-bbox="710 1742 927 1787">2010～2018</td> <td data-bbox="927 1742 1118 1787">佐々木晶</td> <td data-bbox="1118 1742 1402 1787">(21-24 期) 連携</td> </tr> <tr> <td data-bbox="545 1787 710 1832">理事</td> <td data-bbox="710 1787 927 1832">2018～2022</td> <td data-bbox="927 1787 1118 1832">藤本正樹</td> <td data-bbox="1118 1787 1402 1832"></td> </tr> <tr> <td data-bbox="545 1832 710 1906">科学委員会 C 委員長</td> <td data-bbox="710 1832 927 1906">2012～2020</td> <td data-bbox="927 1832 1118 1906">中村卓司</td> <td data-bbox="1118 1832 1402 1906">(23-24 期) 連携</td> </tr> <tr> <td data-bbox="545 1906 710 1982">科学諮問委員</td> <td data-bbox="710 1906 927 1982">2012～2020</td> <td data-bbox="927 1906 1118 1982">中村卓司</td> <td data-bbox="1118 1906 1402 1982">(23-24 期) 連携</td> </tr> </tbody> </table>	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別	理事	2010～2018	佐々木晶	(21-24 期) 連携	理事	2018～2022	藤本正樹		科学委員会 C 委員長	2012～2020	中村卓司	(23-24 期) 連携	科学諮問委員	2012～2020	中村卓司	(23-24 期) 連携
役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別																		
理事	2010～2018	佐々木晶	(21-24 期) 連携																		
理事	2018～2022	藤本正樹																			
科学委員会 C 委員長	2012～2020	中村卓司	(23-24 期) 連携																		
科学諮問委員	2012～2020	中村卓司	(23-24 期) 連携																		

様式第 2 (第12条関係)

	プログラム委員	2012～2020	中村卓司	(23-24 期) 連携
	推薦委員会	2014～2018	大西俊雄	
	推薦委員会	2018～2022	常田佐久	(23-24 期) 連携
	顕彰委員会	2016～2020	新井康平	(22 期、24 期) 特任連携
	科学委員会 A 副委員長	2008～2016	新井康平	(22 期、24 期) 特任連携
	科学委員会 B 副委員長	2016～2018	藤本正樹	
	科学委員会 E 副委員長	2012～2020	河合誠之	
	科学気球パネル委員長	2014～2022	吉田哲也	(22 期) 特任連携
	放射線帯パネル副委員長	2012～2016	三好由純	
	惑星保護ハ°ネル副委員長 (兼科学委員会 B 小天体小委員会委員長 (2014-2022))	2014～2018	矢野 創	
	宇宙テ°プリハ°ネル副委員長	2013～2017	木部勢至朗	
	宇宙天気ハ°ネル副委員長	2012～2016	小原隆博	
出版物	1 定期的 (年 3 回) 主な出版物名 Space Research Today 2 不定期 (年 10-20 回) 主な出版物名 Advances in Space Research Life in Space Research			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 活動報告は Space Research Today 誌に掲載 ( <a href="http://www.journals.elsevier.com/space-research-today/">http://www.journals.elsevier.com/space-research-today/</a> )				



様式第 2 (第12条関係)

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第 3 条、4 条、5 条)

	委員会名	地球惑星科学委員会 国際連携分科会 COSPAR 小委員会
	委員長名	中村卓司
国内委員会 (内規 4 条第 3 号)	当期の活動状況	<p>(開催日時 主な審議事項等)</p> <p>委員構成は 19 名 (うち会員 2 名・連携会員 7 名)、2018 年 2 月 8 日(木)16:00-17:30 に 情報・システム研究機構にて、第 1 回小委員会を開催し、委員長・役員を決め、当期の活動方針を確認した。</p> <p>2018 年 7 月 11 日(水) 16:00-17:00 に 国立極地研究所において第 2 回小委員会を開催し、同月開催の第 4 2 回科学総会(パサデナ)への対処方針を確認した。</p> <p>2018 年 7 月 14-22 日開催の第 42 回科学総会 (パサデナ) に多数の委員が参加 (日本人参加は約 160 名) し、科学セッションやビジネスミーティングで活動した。</p> <p>2018 年 9 月 27 日(木) 16:30-18:00 に国立極地研究所において第 3 回小委員会を開催し、科学総会(パサデナ)の報告および総会招致に関する意見交換、顕彰提案に関する議論を行った。</p> <p>2019 年 2 月 5 日(火) 10:00~12:00 に国立極地研究所において第 4 回小委員会を開催し、顕彰関係に関する議論や 2024 年総会招致の検討について意見交換を行った。</p> <p>2020 年 2 月 26 日(木)16:30~18:00 に国立極地研究所において第 5 回小委員会を開催し、2020 年総会の状況報告や顕彰関係に関する議論を行った。</p> <p>2020 年 8 月 17 日(月)16:30~18:00 に国立極地研究所において第 6 回小委員会を開催し、2020 年総会の状況報告や顕彰関係に関する議論、来期の小委員会設置について議論した。</p>
内規第 3 (国際学術団体の要件関係)		<p>国際学術交流を目的とする非政府かつ非営利的団体である</p> <p>①. 該当する      2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 ( <a href="https://cosparhq.cnes.fr/about/charter">https://cosparhq.cnes.fr/about/charter</a> )</p> <p>COSPAR は、国際地球観測年 (IGY) での観測ロケット及び人工衛星による研究を更に協力的に進めるために 1958 年 10 月に ICSU(国際科学会議)によって創設された、「宇宙空間における科学」を推し進める国際組織である。人工衛星、深宇宙探査機、宇宙ステーション、気球等を用いた様々な種類の宇宙空間の科学研究の推進を目的として活動をしている。委員会という名称であるが、実際には ISC(ICSU) の学際組織として、隔年の科学総会や出版物を中心として、研究成果・情報・意見を交換し、国際協力を推進している。</p> <p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)</p> <p>①. 該当する      2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載</p>

様式第 2 (第12条関係)

<p><a href="https://cosparhq.cnes.fr/about/charter">https://cosparhq.cnes.fr/about/charter</a></p> <p>II Member の定義 主たる会員は「国家会員」と（各国の公的学術機関及び学術研究団体等）と ICSU のもとの国際科学組織である。</p> <p><a href="https://cosparhq.cnes.fr/about/national-scientific-institutions">https://cosparhq.cnes.fr/about/national-scientific-institutions</a> に日本学術会議を含む国家会員のリストが載っている。</p> <p>COSPAR 総会の参加者は associate として登録される。国内においても COSPAR 参加者は、天文学、地球惑星科学、物理学のみならず、工学、生命科学まで範囲は広がっており、関連する学会も 30 を越える。COSPAR は、IAU,IUGG などの ISC(ICSU)傘下団体とも連携しており、国内においても学術会議を通じた関連分野の連携が有効である。日本では学術会議以外に、この広い分野のコミュニティの意見を集約できる組織は無い。COSPAR への加入団体として、宇宙機関が担っている国もあるが、先進 8 か国においては、日本の学術会議もしくは学士院に対応する組織が加入団体となっている。宇宙開発利用のなかで、科学の主体性を保ち、宇宙科学の進歩のためには、宇宙機関以外で宇宙科学を議論することができ、公式の提言等を発信できる組織がのぞましい。</p>	
<p>下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）</p> <p>ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの ○イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
<p>10 カ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p>①. 該当する          2. 該当しない</p>	
<p>加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載</p>	<p>( 44 ケ国)</p> <p>・各国代表会員名／国名 米国、国立科学・工学・医学アカデミー フランス、科学アカデミー 中国、中国科学院国立宇宙科学センター ドイツ、ドイツ研究振興協会 カナダ、カナダ国立学術会議 英国、ラザフォードアップルトン研究所 ロシア、ロシア科学アカデミー インド、インド国立科学アカデミー オランダ王立芸術科学アカデミー 日本、日本学術会議 (なお、国家のほか、13 の自然科学分野のユニオンが COSPAR のメンバーとして登録されている)</p>